

調査概要

調査名	音と減災に関する調査2026
目的	・前回調査結果との比較による、防災に関する認識や実態の変化の把握 ・子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた新たな課題の抽出
方法	インターネットリサーチ
期間	2026年7月27日～2026年8月3日
対象	全国の小学生の子どもを持つ保護者
有効回答数	609人
調査協力・アドバイザー	大阪大学大学院人間科学研究科安全行動学研究分野 特任研究員 岡 真裕美 氏

調査結果サマリー

本調査では、危険察知における「聴覚情報」の重要性が10年後も変わらない一方、子ども自身が判断し行動する力を育むことの重要性が改めて見えてきました。

1. 2017年調査から変わらなかったこと

■災害発生時の初動では、今も「聴覚情報」が重要

■ 家庭での防災教育の壁は、今も「どう教えればよいか分からない」

2. 社会環境の変化を踏まえた設問から見えてきたこと

■保護者と離れて過ごす機会は多い一方、自ら行動する力は十分に身に付いていない

—約7割の子どもに、留守番や外遊びなど保護者・家族と離れて過ごす時間がある

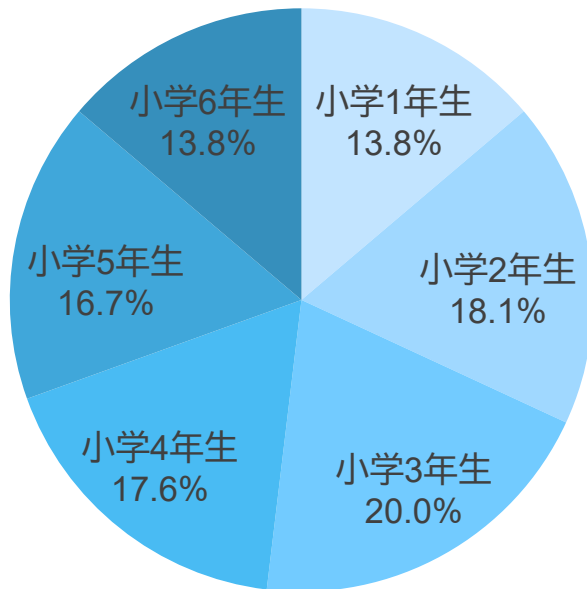
—危険を知らせる音を聞いた子どものうち、自ら適切に行動できたのは1割台

—1年生が子どもだけで過ごす頻度は他学年と同水準である一方、災害時の行動や家族との連絡方法を教えている割合は全学年平均を下回る(クロス集計)

回答者属性

回答者の子どもの学年比率は、各学年で概ね同程度です。

Q:小学生のお子さまの学年を教えてください。ご家庭に小学生のお子さまが複数いらっしゃる場合は、このアンケートにおけるお子さまに関する設問はすべて「小学生の中で一番上のお子さま」についてお答えください。 ※回答数:609、単一回答

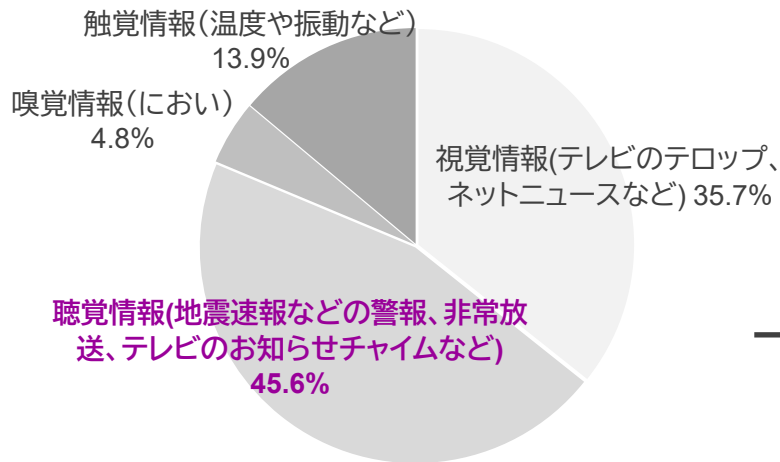


調査結果と考察

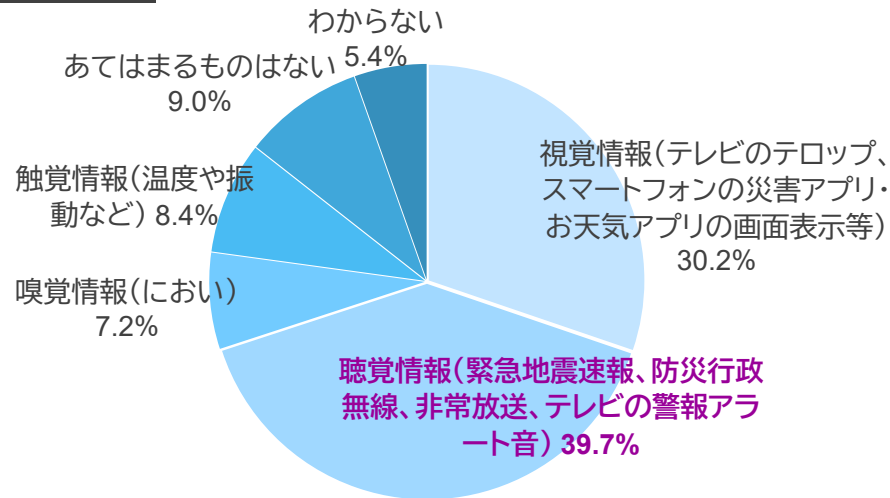
2017年調査と比較して、変わらなかったこと

Q:災害発生時、あなたがいち早く危険を察知し、身構えたり、避難準備や安全確認、家族の安否確認など次の行動を起こすきっかけとして、最も頼りにするツールはどれですか ※回答数:609、単一回答

2017年



2026年

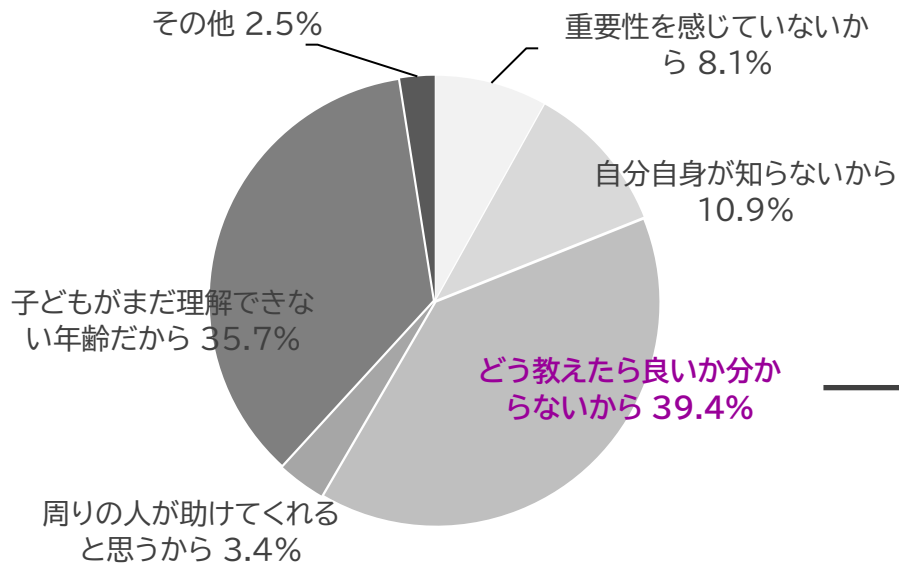


➡災害発生時の初動では、今も「聴覚情報」が重要 ※2017年調査でも「聴覚情報」が最多

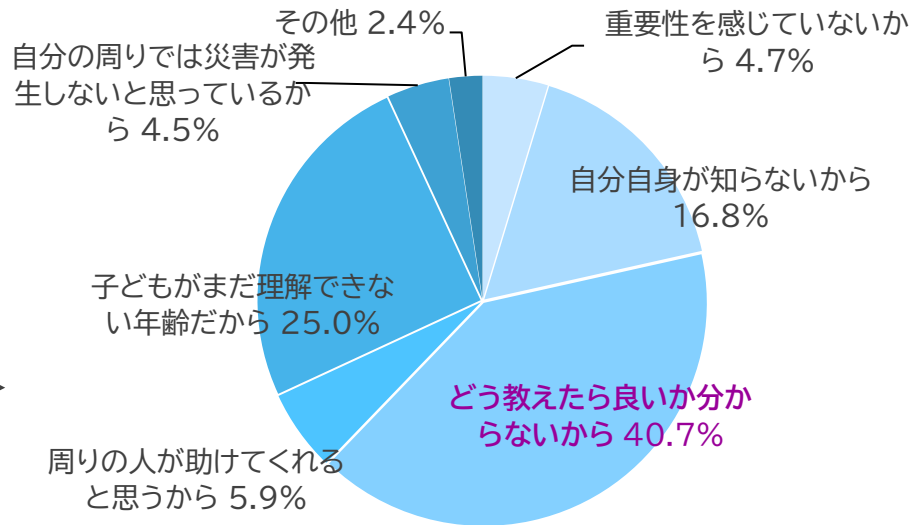
2017年調査と比較して、変わらなかったこと

Q:緊急地震速報や防災放送など災害を報せる音の意味や、その後取るべき行動について小学生のお子さまに話をしていない理由として、最も当てはまるものをお選びください ※回答数:573、単一回答

2017年



2026年



→家庭での防災教育の壁は、今も「どう教えればよいか分からない」

2017年調査と比較して、変わらなかったこと

保護者の知識不足 と 子どもの特性の両方が背景に

保護者が「どう教えたらよいか分からない」と感じる背景には、保護者世代が受けてきた防災教育の内容や経験の違いがあると考えられます。避難訓練は地域差があるものの、「机の下にもぐる」「ハンカチで口を覆って運動場に集まる」といった比較的単純な内容が中心で、現在の子どもたちほど体系的な防災教育を受けてこなかった世代も少なくありません。そのため、防災に関する知識や経験には個人差があると考えられます。

一方で、保護者世代は東日本大震災をはじめとするさまざまな災害を経験・見聞し、生活の中で防災知識を身に付けてきました。しかし、自身が感覚的に理解していることを子どもに分かりやすく伝えるのは容易ではなく、分野によっては現在の子どもたちの方が詳しいこともあるでしょう。

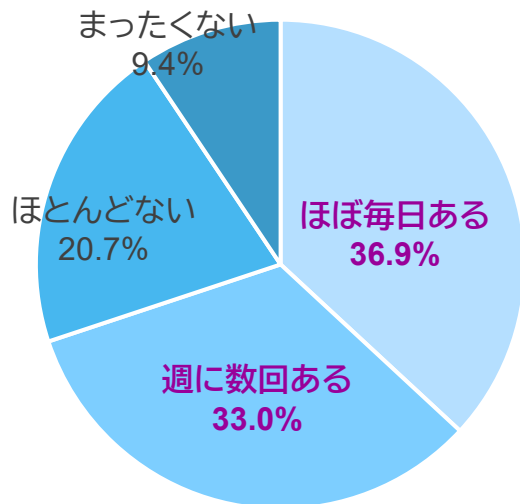
また、小学校低学年ごろまでの幼い子どもは、「知識として知っていること」と「実際に行動できること」がまだ十分に結び付いておらず、その時の感情や周囲の状況に影響を受けやすい傾向があります。さらに、学んだことを別の場面に当てはめて応用することも得意ではありません。

そのため、例えば「地盤が緩い場所や増水しそうな場所は通らないように」といった説明だけでは、今いる地域のどこが危険で、どこを通ればよいのかを自分で判断することが難しい場合があります。だからこそ、「雨の時は遠回りになってもこの道を通りなさい」など、子どもの行動範囲を踏まえながら、取るべき行動を具体的に伝えておくことが重要です。

(大阪大学大学院 人間科学研究科安全行動学研究分野 特任研究員 岡 真裕美 氏)

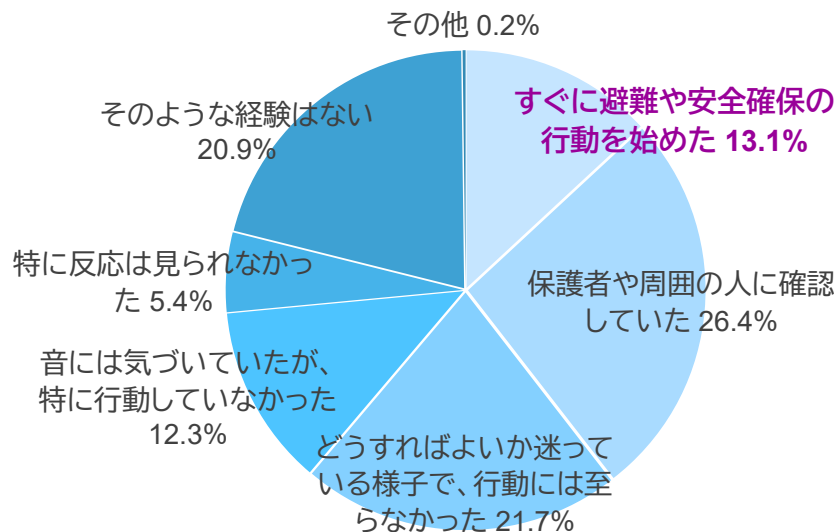
社会環境の変化を踏まえた設問から見えてきたこと

Q:小学生のお子さまが保護者や家族と離れて過ごす時間は、どのくらいありますか ※回答数:609、単一回答



➡約7割の子どもに、
保護者や家族と離れて過ごす時間がある

Q:これまでに、小学生のお子さまが危険を知らせる音を聞いた際、最初に見られた反応として最も近いものを選んでください ※回答数:609、単一回答



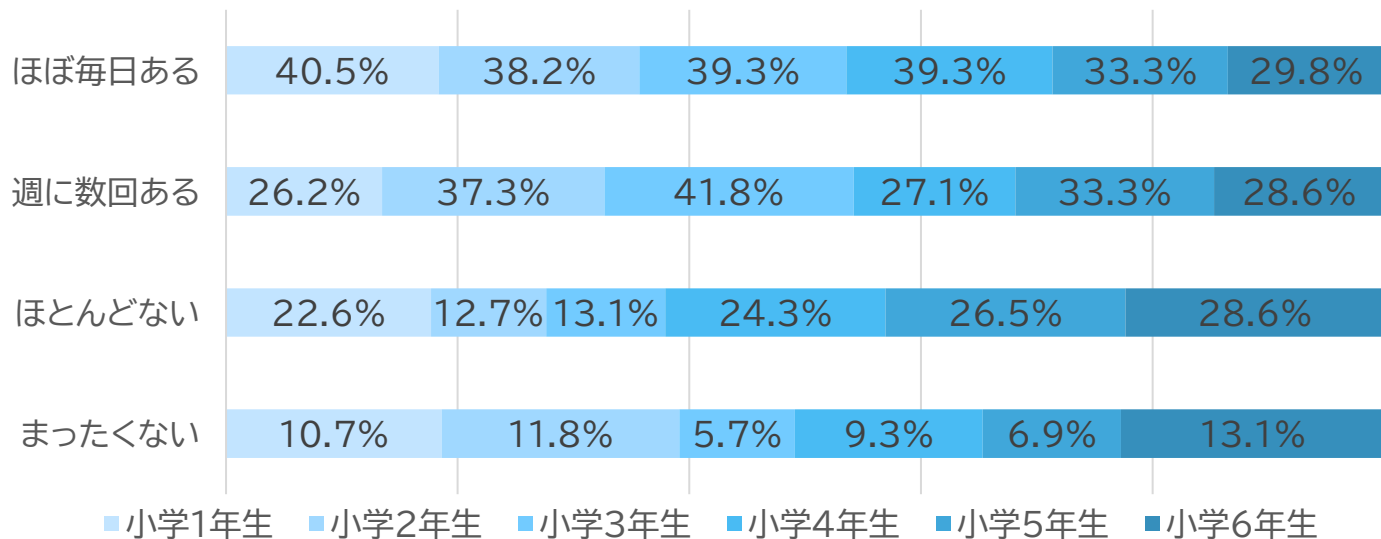
➡危険を知らせる音を聞いた子どものうち、
自ら適切に行動できたのは1割台

社会環境の変化を踏まえた設問から見えてきたこと

クロス集計

Q:小学生のお子さまが保護者や家族と離れて過ごす時間は、どのくらいありますか。 ※回答数:609、単一回答

Q:ご家庭に小学生のお子さまが複数いらっしゃる場合は、このアンケートにおけるお子さまに関する設問はすべて「小学生の中で一番上のお子さま」についてお答えください。 ※回答数:609、単一回答



➡ **1年生**が子どもだけで過ごす頻度は他学年と同水準

社会環境の変化を踏まえた設問から見えてきたこと

クロス集計

Q:ご家庭での小学生のお子さまへの防災教育の内容について教えてください ※回答数:609、複数回答可

Q:小学生のお子さまの学年を教えてください。ご家庭に小学生のお子さまが複数いらっしゃる場合は、このアンケートにおけるお子さまに関する設問はすべて「小学生の中で一番上のお子さま」についてお答えください。※回答数:609、単一回答

	n	災害発生時の行動を教えている	家族との連絡方法を教えている	何もしていない
総数	609	38.8%	30.7%	23.2%
小学1年生	84	25.0%	11.9%	29.8%
小学2年生	110	41.8%	30.0%	20.0%
小学3年生	122	33.6%	32.0%	18.9%
小学4年生	107	37.4%	34.6%	20.6%
小学5年生	102	52.0%	41.2%	20.6%
小学6年生	84	41.7%	31.0%	33.3%

➡(前頁より **1年生**が子どもだけで過ごす頻度は他学年と同水準である一方、)

1年生に、災害時の行動や家族との連絡方法を教えている割合は全学年平均を下回る

社会環境の変化を踏まえた設問から見えてきたこと

知識を「行動できる力」に変えるために

子どもが危険な場面で適切に行動するためには、防災知識を教えるだけでなく、実際の避難行動をイメージできる経験を積むことが重要です。防災体験ができる施設を訪ねたり、映像教材や絵本、人形劇などを活用しながら、「自分ならどうするか」を考える機会を増やすことで、学びをより自分ごととして捉えやすくなります。

また、日ごろから保護者がおらず、子どもだけにいる場面を想定し、「ここで地震が起きたらどこへ逃げるか」「外出先で警報音が鳴ったらどうするか」などを親子で話し合ったり、防災グッズを用意し、保管場所を家族で共有する、実際に保存食を食べてみる、懐中電灯で夜を過ごしたりするなど、できる範囲で行動してみることも大切です。

「防災」を掲げずとも、時には遊びを取り入れた平時のこうした積み重ねが、有事の際の迅速な判断と行動につながると考えます。

(大阪大学大学院 人間科学研究科安全行動学研究分野 特任研究員 岡 真裕美 氏)

<参考>

大阪大学大学院人間科学研究科安全行動学研究分野 特任研究員 岡 真裕美 氏 プロフィール

奈良女子大学卒業後、中学校・高等学校の国語科教員として勤務していたが、身内の事故死をきっかけに大阪大学大学院にて子どもの事故予防を研究。現在は、子どもの事故予防や教育・保育関係者の安全意識向上をテーマに講義や情報発信を行う。

ABCテレビ「おはよう朝日です」レギュラーコメンテーターほか、メディア出演・取材実績多数。著書に「～事故・ケガで 我が子を事故で死なせないために ～子どもを全力で守る本」(いそっぷ社)。

